2017 年度
非文字資料研究センター
第 1 回公開研究会

「いまなぜ上海研究か？」

日　　時：2017 年 5 月 27 日（土）午後 3：00 ～ 6：00
場　　所：神奈川大学横浜キャンパス　1 号館 804 会議室
開会挨拶：内田青蔵（非文字資料研究センター長）
司　　会：孫安石（非文字資料研究センター研究員）
報　　告：(1)「近代上海の公園と都市への展開」熊月之（上海社会科学院歴史研究所）
(2)「上海と港湾の研究の回顧と展望」戴鞍鋼（復旦大学）
(3)「上海フランス租界の日本建築について」陳祖恩（東華大学）
コメンテーター：熊谷謙介（神奈川大学）、菊池敏夫（神奈川大学）、石川照子（大妻女子大学）

報告

孫安石
（非文字資料研究センター研究員）

2017 年 5 月 27 日、神奈川大学非文字資料研究センターの主催による公開研究会「いまなぜ上海研究か？」が開催された。

非文字資料研究センターの共同研究班の一つである租界・居留地班は、19 世紀末から 20 世紀前半に至るまでの東アジア開港場（租界・居留地）と日本との関係について、ここ 10 年来、様々な研究成果を蓄積してきた。その中でも最も多くの研究調査と成果を出している場所、都市が上海である。そして、この 10 年間における研究動向の変化の中で、最も特筆すべきことは、中国人研究者自身による上海都市研究の活発な展開がある。その中心を担う組織が上海社会科学院歴史研究所と復旦大学・国際上海研究センターである。そこで、今回の公開研究会は、上海研究の中心を担う熊月之教授と戴鞍鋼教授、そして、東華大学の陳祖恩教授をお招きし、「いまなぜ上海研究か？」というテーマでご報告いただき、本センターが推進する都市研究に関連する新たな知見を確保したい、というのが、開催の趣旨であった。以下、各報告者の報告の要点を紹介していく。

「国際都市」上海を公園から読み解く

まず、熊月之氏の報告は、「近代上海の公園と都市への展開」をテーマに、イギリス人、フランス人、日本人、中国人のコミュニティを象徴する公園がどのように設立し、どのような社会的役割を担っていたのかを紹介するものであった。

共同租界のイギリス人コミュニティを代表する公園は、外灘公園とジェスフィールド公園（Jessfield Park）である。外灘公園は 1868 年に建設された上海で初めての近代的な公園で、イギリスとアメリカの文化を象徴するアイコンを備えていた。英米人は外灘公園に中国内陸の探検で犠牲になったイギリス人の通訳 Margary を記念する「馬嘉理記念碑」を建立し、太平天国の反乱を平定した時に活躍したイギリスの軍隊である常勝軍（Ever Victorious Army（アメリカ人のフレデリック・タウンゼント・ウォード、Frederick Townsend Ward、中国名は華爾、が指揮した））を記念する記念碑を建設している。外灘公園は共同租界の重要な式典が行われる場所でもあった。

フランス租界を代表する公園として重要なのは、顧家宅公園（フランス公園、parc de kuokaza）である。顧家宅公園は、1909 年春に設立された。フランス人の園芸設計師である柏勃（Papot）の設計によるもので、フランスのリヨンの公園を真似して作られた。1909 年に顧家宅公園が開放された日は、フランスの建国記念日に合わせて 7 月 14 日とした。また、フランスの建国記念日を祝う飛

行で犠牲になった環龍（René Vallon）を記念する環龍記念碑が 1912 年に建設された。1922 年 3 月にフランスの Jessfield 将軍が上海を訪問した時の歓迎会が行われたのもこの公園であった。

日本人コミュニティと関係が深い公園としては六三園と虹口公園を挙げることができる。六三園は日本人白石六三郎によって上海に設立された庭園で、1908 年に白石が江湾一帯の土地を買い入れ、後に六三園と名付けた庭園が完成することになった。そこは、日本人居留民会が日本の政治家や重要な訪問客を歓待する場所であり、宮崎滔天と孫文、そして、多くの日中文化人の交流も行われ、上海で初めて日本の神社が置かれた場所でもあった。

虹口公園は 1905 年に公園に指定された後に、日本人に最も愛される公園になった。ここは日本人が散歩を楽しみ、スポーツ活動を行う場所であり、1928 年以降に日本人居留民が開催した記念行事の多くは虹口公園で行われた。また、朝鮮が日本の植民地にされたことに反対する朝鮮人抗日義士の尹奉吉が上海駐屯軍司令官であった白川義則を狙った「上海天長節爆弾事件 」の舞台になったのもこの公園であった。

熊月之氏

次に、中国人社会と最も密接な関係が認められる公園は張園と半淞園である。張園は静安寺路（現在の南京西路）の南、同孚路（石門一帯）の西に位置し、上海で巨万の富を蓄積した無錫の豪商張淑和が上海に築いた庭園である。張園は、清末民初期の上海の各種集会が開催される広場としての役割をも果たした。張園の中に建てられた欧米風の建物 Arcadia Hall（中国名：安墹第）は、上・下のホールを合わせれば、約 1000 名を収容することができ、上海の中国人が主催した多くの集会がこの場所で開催された。

半淞園は 1918 年に上海青浦で巨万の富を蓄積した豪商沈志賢によって創立された。その規模は 2.87 平方メートルを占め、上海の南地区においては最大の規模を誇った。半淞園では、常時花の展覧会が開催され、夜は爆竹などが鳴らされ、多くの人々でにぎわった。中国の伝統的な蘭、菊、梅、牡丹の花の展覧会は特に有名で、その他には、伝統芸能の昆曲の上演が多くの人々に愛された。半淞園はまた、地方政府の官僚が宴会を開く場所でもあった。その中でも特筆すべきは、1927 年 8 月に国貨運動（国産品愛用運動のこと）大会が半淞園で開催されたことであろう。

張園の全景（左上の建物が Arcadia Hall、上海市檔案館編『追憶―近代上海図史』上海古籍出版社、1996）

上海港の歴史的変遷と新たな研究動向

次の戴鞍鋼氏の報告は「上海と港湾研究の回顧と展望」と題するもので、上海における港湾研究の歴史的な変遷を紹介するものであった。

それによれば、上海港の歴史的変遷過程は大きく六つの時期に分けられる。まずは、(1) 青竜鎮の発展の時代で、これは唐宋時代の吳淞江畔（現在の上海市青浦区域内）に位置する一帯が発展し、日本や高麗に向けた瓷器の輸出が活発な時期が長く続き、(2) それを引きついだのが清代の十六浦（現在の豫園商業区）の時代であり、1843 年の上海開港以前に中国南北洋海の船舶の貨物中継地として十六浦は発展した。次は (3) 外灘の時代となり、1843 年の上海開港後、外国の商社が最初に設けられた場所として外灘が発展した。そして (4) 虹口地区は、1870 年のスエズ運河開通後、外国の遠洋汽船が主に停泊する場所として発展し、(5) 1895 年以降は、主に国内外への石油や石炭の輸送のための埠頭として浦東が見いだされた。その後、改革開放を迎えた 1980 年代以降は、(6) 呉淞と外高橋地区、そして洋山深水港が現代上海を代表する埠頭として注目されるに至っている。

上海港が、周辺に位置する瀏河港（現在の江蘇省太倉

市域内、長江に面し、明朝の鄭和渡欧の出発地であった）や乍浦港（現在の浙江省嘉興市域内、東シナ海に面し、主に日本や朝鮮との海運の往来地であった）との競争に勝ち抜くことができた主な要因は、水深の深さ、沿岸の埠頭の立地、上海の後背地の空間、中国と外国資本による投資の集中などが考えられる。

また、「国際都市」上海と港湾の相互関係を考える時には以下の５点が重要である。

一つ目には、開港に伴う租界の設置である。イギリスが目を付けた上海という港湾都市が、埠頭としての優れた立地条件を備え、莫大な後背地の経済規模を合わせてもっていたことは重要である。

二つ目には、港による街の発展において、上海は中国の貿易の最大の港であり、金融の中心地であったことである。上海は常に、貿易取引（商館、買弁、商人団体）、資金融通（両替屋、銀行、短期ローン）、情報伝達（電報、電話、新聞）の中心地であった。

三つ目には、上海は港湾の発展により工業が発展した都市でもあるという事実である。イギリスやアメリカ等が上海に最も早く投資し設立したのが造船業であり、近代的な製糸業、紡績業が集積したのも上海であった。造船業と紡績業は、早期の上海工業の支柱となる産業であった。

四つ目には、港による都市の拡張が続き、上海が中国最大の都市に発展したことである。例えば、租界を中心とした中心市街地として、外灘（イギリス租界）、十六鋪（フランス租界）、虹口（アメリカ租界）地区が発展し、周辺市街地として、浦東（黄浦江の東側）、閘北、曹家渡（蘇州河両岸）の人口が増え工業が拡大し、出身地の異なる人々（中国と外国の船主、船員、海外と国内からの移民、苦力、店員、秘密結社、娼婦など）が上海に集まったことで、上海の社会階層は多層化、多様化した。

戴鞍鋼氏

今までの上海港湾関係の研究は当然のことながら、経済、労働、貿易関係が中心であったが、近年は上海史の都市研究や社会・文化史の研究などに強い影響を受けている。例えば、上海の港湾地区を舞台にした犯罪行為の研究、The Illustrated London News などの雑誌が 1873 年にはすでに上海で入手可能であったことを指摘する研究、中山大学（広州）を中心とする外国人の税関と税関員の生活に関連する研究などの分野において若手の活躍が著しい。

上海のフランス租界の日本建築―「外洋内和」

続く陳祖恩氏の報告は、上海フランス租界の日本建築を紹介したものであった。氏によれば、上海の三大日本人居住地は、(1) 虹口の日本人街、具体的には日本人の商業街が密集し、「土着派」（注：日清戦争を前後した比較的に早い時期に上海に拠点を設けた人々で主に中小企業に従事した）の主要居住地であった呉淞路地区と「会社派」（注：1910 年代以降に貿易の増加に伴い増加した商社、銀行、紡績会社などから派遣された人々）が集中する北虹口地区、(2) 滬東（楊樹浦地区）、滬西（小沙渡地区）の日本人経営の紡績工場 (在華紡) とその従業員宿舎が集まる地区、(3) イギリス租界、フランス租界における日本の大手商社の所在地に住むエリート従業員の居住地に分かれる。

そして、上海における日本建築の特徴をまとめるならば、日本文化と西洋文化が「国際都市」上海で融合したという意味を込めて「外洋内和」という成語で表現できるのではないかと指摘した後で、フランス租界に位置していた豊田佐吉（豊田紡織の創立者）の別荘の跡地が未だに特定できていないことに触れ、その場所が、淮海中路・ウルムチ路の交差点付近（アメリカ領事館があった場所）と今の淮海中路の日本領事館官邸（もと盛宣懐旧宅）の間にある「上海新村」にあったという説（現在の日本上海総領事の片山和之が主張する説）が有力であると紹介している。

上海自然科学研究所（劉育文編『老明信片・建築編』上海画報出版社、1997 年より）

フランス租界にあった日本建築として重要な建築物は、その他に三井庭園がある。三井庭園は、フランス租界の中心地に当たる金神父路（現在の瑞金二路）とラファイエット路（現在の復興中路）の曲がり角に位置していた。

この建物は、実際には、三井物産の第三代支店長である山本条太郎が 1908 年に建造したもので、設計者は平野勇造であった。平野勇造は、上海で活躍した建築家の一人で、その他に上海日本領事館、三井洋行上海支店ビル、裕豊紡績工場などを残している。三井庭園は単なる三井物産の支店長の生活空間であっただけではなく、上海の日本人コミュニティの一部をなす公共の機能を合わせもった庭園であった。この意味で、三井庭園はフランス租界における日本文化のランドマークであったといえる。

次にフランス租界の祁齊路（現在の岳陽路）320 号に位置した「科学の殿堂」上海自然科学研究所である。同研究所の本館の建築は、東京帝国大学工学部教授の内田祥三が設計し、島岡技師が監督して 1928 年 10 月に着工、1931 年 8 月に完成した。さらに 1936 年春には、敷地内に 3 階建て鉄筋コンクリート造りの職員住宅を建設したが、この新しい職員住宅は当時の上海の高級マンションと同様に、洋式の装飾がなされ、ガス、バス、トイレなどが完備されていた。この研究所が自由な文化を享受できるフランス租界に位置し、日中の医学関係者の交流の場として機能したのは、注目に値する。

フランス租界は上海の文化、教育、流行の中心で、高級住宅地が集中した場所である。このフランス租界に現存する日本の建築物は、近代の日本文化を表現したものであり、西洋と東洋の文明が混在する上海に残された優秀な建築遺産であるといえるだろう。

陳祖恩氏

以上、3 氏の報告の内容を簡単に要約しながら上海研究の最新の研究動向について紹介を試みた。報告で取り上げられた公園、港湾、フランス租界と日本建築の関係については、いずれも非文字資料研究センターの共同研究班「租界・居留地班」が第四期の研究課題としている「東アジアの開港場における日本人の諸活動と産業」研究の一部をなす重要な研究テーマの一つである。今後も中国や韓国、台湾その他の国の最新の研究動向と連携を取るよう心がけたい。

3 氏の報告の後、熊谷謙介氏（神奈川大学）、菊池敏夫氏（神奈川大学）、石川照子氏（大妻女子大学）による質疑応答も行われ、非常に高いレベルの討論ができたものの、今回の紹介にはそれを反映させることができなかった。できるだけ早い時期にその時の討論内容を紹介することを期したい。

以下に、3 氏の報告者の主な著作を挙げるので、参考にしてほしい。

発表後の記念撮影

◎熊月之教授の関連業績

『西学東漸与晩清社会』（修正版、中国人民大学出版社、2011 年）

『上海的英国文化地図』（共編、上海錦綉文章出版社、2011 年）

『上海史国際論叢』（主編、三聯書店、2014 年）

◎戴鞍鋼教授の関連業績

『中国近代経済地理・江浙滬巻』（共編、上海、華東師範大学出版社、2014 年）

『社会変遷与百年転折叢書』（共編、東方出版中心、2015 年）

『江河帰海―多維視野下的上海城市文明』（共編、上海、上海人民出版社、2016 年）

◎陳祖恩教授の関連業績

『上海に生きた日本人―幕末から敗戦まで』（日本語、大修館書店、2010 年）

『上海的外国文化地図』共編（上海、上海錦綉文章出版社、2010 年）

『老上海城記―西洋人与東洋人』（上海、上海錦綉文章出版社、2011 年）

『戦時上海』（共編、上海、上海遠東出版社、2016 年）